



反・学校小説「坊っちゃん」

西村, 好子

(Citation)

國文論叢, 29:47-57

(Issue Date)

2000-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD01)

<https://doi.org/10.24546/81012941>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012941>



反・学校小説『坊っちゃん』

はじめに

『坊っちゃん』論は、啖呵のいい江戸っ子の語りとその構造⁽¹⁾、清を中心に扱われることが多いようであるが、学校という場に反して考えていくことが、大切ではないかと思われる。なんといても、『坊っちゃん』は学校小説⁽²⁾なのだから。というより、反・学校小説⁽³⁾、「反・教育小説」だから名作なのだ。というの、結局のところ、漱石は明治の社会が紡ぎ出した学校をめぐるパラダイムの幻想を、たたき潰したかったのではなかっただろうか。その潰し方は、『坊っちゃん』の末尾において明らかにされるが、いかにも稚拙ではほえましいくらいである。ということとは、蠅蠅の斧に過ぎなかったということなのだ。

それは、反・学校小説『坊っちゃん』を書いている明治三十九年三月の夏目漱石にも跳ね返ってくることであっただろう。すでに、竹盛天雄「坊っちゃんを受難」(『文学』一九七一・一二)が指摘しているように、同年二月、漱石は東京帝国大学教授会に反抗し、英語学入試委員を辞退した。それが、『坊っちゃん』執筆

西村好子

の大きな動機の一つといわれてきたが、私としては、同年二月二十五日、清国南京三江師範学堂を辞職した菅虎雄のこともあげたい。菅虎雄は、「学生時代から漱石の親しい友人であり、五高・一高でも同僚であった」(岩波版『漱石全集』注)。

ところで、親友・正岡子規亡き後、彼に替わる者はいなかったわけだが、強いていえば、狩野亨吉と菅虎雄ということになるだろう。菅虎雄が「愛媛県尋常中学校英語教諭の口を周旋」(江藤淳『漱石とその時代第一部』新潮選書)したのだし、菅虎雄・狩野亨吉・夏目金之助の三人は、熊本の第五高等学校には、就任の後先はあるものの同僚として勤務し、第一高等学校には校長になった狩野亨吉について異動した。次に、明治三十九年七月、京都帝国大学文科大学長に内定していた狩野亨吉が、菅虎雄を第三高等学校に招き、ついで漱石を京大に招聘しようとしたが、漱石は結局朝日新聞社に入社した(明四十・三)。その意味でいえば、友人たちとのユートピアを捨てて東京に残った漱石は、学生時代教師時代を濃密に過ごした友人たちと別れ、学校という場で生きていくことをやめたのである。『坊っちゃん』は、反・学校小説

という形をとることによって、漱石が学校という場から降りる契機としての一里塚的役割を果たしたといえるのではないだろうか。

明治三十六年四月東京帝国大学英文科講師になって以来、漱石は、内面の鬱屈を晴らすように、菅虎雄に一貫して大学をやめたという希望を手紙で漏らしている。

大学の方は此学期に試験をして見て其模様次第にて考案を立て考案次第にては小生は辞任を申出る覚悟に候（明三六・五・二一）

高等学校ハスキダ大学ハヤメル積ダ（明三六・六・一四）

僕大学ヲヤメル積デ学長ノ所へ行ツテ一応卑見ヲ開陳シタガ学長大気焰ヲ以テ僕ヲ萎縮セシメタソコデ僕唯々諸タトシテ退クマコトニ器量ノワルイ話シチヤナイカ（明三六・七・二）

僕大学をやめて江湖の処士になりたい。大学は学者中の貴族だね。何だか気に喰はん。（明三九・一・一四）

これらの書簡の延長線上に英語学入試委員問題がおり、漱石は頑固に辞退という主張を貫いた。しかし、次のように漱石が励ましたにもかかわらず、菅虎雄は辞任した。

元来喧嘩をして相手が居るのに自分の方が引くのは間違つて居る。是非共相手をやめさせなければならん。もし相手がやめれば自分は辞職する必要はないものと思ふ。（清国南京三

江師範学堂 菅虎雄宛 明三九・一・三一）

明治三十九年二月、漱石と菅虎雄に立て続きに、学校側と抵触する軋轢が生じ、漱石はともかく菅虎雄は辞任し帰国し浪人生活

を送ることとなる。この二人が学校という制度に翻弄され、苦渋をなめた体験を踏まえ、明治二十八年の松山中学校を下敷きにして、明治三十九年の東京帝国大学・清国南京三江師範学堂を射程にのけて学校というパラダイムを批判し、いわば敗北した菅虎雄に代わつての代理戦争のような気合で『坊っちゃん』は、描かれたと考えてもいいのではないだろうか。

しかし、坊っちゃんの正義は、結局のところ生卵を投げ付けることでしか実現されない。会津つば・山嵐は辞表を叩きつけ、柗屋という旅館に籠もり、赤シャツを鉄拳制裁するほかに術はない。「天誅党」（十一）たる二人は、ぼつと別れ二度と会わない。二人による共同体は、成敗すべき赤シャツという存在のおかげで、つかのまの夢のように結ばれる。『坊っちゃん』の読後に忍び寄るはかなさは、「清の墓は小日向の養源寺にある」（十一）という結末の一文ばかりのせいではあるまい。学校という場に対抗する坊っちゃんと山嵐の友情の誕生と決別に立ち会ったためでもある。それに、その対抗手段の稚拙さ・弱々しさが、学校をめぐるパラダイムの幻想の強固さを際立たせる。現代においては、さらにその幻想は、拡大し跳梁しているだろう。彼ら二人が、いかにかなばなく「天誅」をふるつたとしても、つぶすことはできず、逆に排除されるほかないという挫折は、友情をせつなく彩る。その友情が結実するのは、「遊廓で鳴らす太鼓が手に取る様に聞える」（十二）一夜のみなのだ。その「太鼓」とは、坊っちゃんと山嵐が性的なものから疎外されていることを暗示している。それも、この作品の読後に醸し出されるはかなさを強めているだろう。

『坊っちゃん』という作品を、貫いているのは、善悪のさわやかな二分法である。これを「勸善懲惡の伝統」の復活（江藤淳⁷⁾）とすることもできるし、代理戦争の具体化とすることもできる。なにしろ、戦争には敵・味方と分けることが不可欠なのだから。

『坊っちゃん』（明三九・四）執筆の五か月後の『文学談』（明三九・九）において、漱石は自己の作品の解説として以下のように述べている。

文学は矢張り一種の勸善懲惡であります。（中略）自分の良心にはつかしからぬ様に勸善懲惡をやりたい。

当然、善の核は、語り手・坊っちゃんであり、惡の核は赤シャツである。読者は、語り手の善の意識の中に包まれ、のびやかに物語空間を生き始めることができる。

では、善の核・坊っちゃんはどのようにして形成されたのだろうか。

有名な冒頭「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る」（一）という「無鉄砲」さが坊っちゃん特有の「あなたは真直でよい御気性だ」（二）という清のほめ言葉を引き出すことになる。さらに、それは成長しながらより助長されていくことが、たたみかける調子で描かれる。二階からの飛び降り、親指を切ろうとしたあとの瘡痕、質屋の勘太郎との喧嘩、茂作の人参畑荒らし、古川の井戸埋め、兄との喧嘩、「乱暴者の悪太郎と爪弾き」（二）されるばかりにさえなっている。このような「乱暴者」と

いう坊っちゃんの設定は、後に登場するいたずらをして罰をうけようとしないう「腐つた了見」（四）の中学生と対峙されることとなる。

ところで、「教育のない婆さん」（二）である清が、「乱暴者」坊っちゃんをすべて肯定し逆に「あなたは真直でよい御気性だ」とほめてくれる。そこに坊っちゃんの立脚地が作られていく。立脚地とはなにかといえ、いくら教育しようとしてもできない人間の資質というようなものだろう。文明というイデオロギーのもとに怒濤のごとく輸入された学校という幻想への異議申し立てを、「親譲りの無鉄砲」という言葉と「坊っちゃん」というあだなが示している。その「坊っちゃん」という価値について漱石は次のように述べている。

然し人が利口になりたがつて、複雑な方ばかりをよい人と考へる今日に、普通の人のよいと思ふ人物と正反対の人を写して、こゝにも注意して見よ、諸君が現実世界に在つて鼻の先であしらつて居る様な坊っちゃんにも中々尊むべき美質があるではないか、君等の着眼点はいかに偏頗ではないか、と注意して読者が成程と同意する様にかきこなしてあるならば、作者は現今普通人の有してゐる人生觀を少しでも影響し得たものである。（『文学談』明三九・九）

坊っちゃんの「美質」という善なるものとは、単純性ひいて言えば「利口」でないこと、つまり「馬鹿」であることだ。その価値を漱石は言おうとしているのである。この「馬鹿」であることについては、すでに佐藤泰正『『坊っちゃん』へうた』という発想をめぐって」（『夏目漱石論』所収 筑摩書房 一九八六・一一）

が、以下の書簡を挙げている。

『御前が馬鹿なら、わたしも馬鹿だ。馬鹿と馬鹿なら喧嘩だよ』今朝かう云ふうたを作りました。此人生觀を布衍していつか小説にかきたい。(中略)先づ当分は此うた丈うたつてゐます。(高浜虚子宛 明三九・八・十二)

また、秋山公男『坊っちゃん』の思想』(『文学』一九九十・七)は次のようにとりあげている。

『坊っちゃん』にその基本的なイデーを供給し、執筆に導いた「イワンの馬鹿」との遭遇は、この作品成立の最大の契機として逸することができない。

以下、「イワンの馬鹿」の寄贈を受け、感謝の意を示す内田魯庵宛書簡(明三九・一・六)が引用してある。さらに、漱石の松山・熊本時代に遡行し、「漱石固有の『守拙持頑』の理念」へ言及し、「正月の男といはれ拙に処す」(明三一・一)や「董程な小さき人に生れたし」(明三十・二)や「木瓜咲くや漱石拙を守るべく」(同前)などの俳句や漢詩も引用されている。

以上二論文は、『坊っちゃん』執筆前後に漱石が「馬鹿」の持つ価値に目覚めたことを語っている。後者の場合は、ほぼ十年前に遡行して松山・熊本時代も振り返っている。私としては、漱石の俳号・愚陀仏も取り上げられるし、松山行きをした直後の次のような書簡も加えるべきだと考える。

東京にてあまり御利口連にツ、突かれたる為め生来の馬鹿が一層馬鹿に相成候様子に御座候然し馬鹿は馬鹿で押し通す「よ」り別の分別無之只当地にても裏面より故意に癪癪を起さする様な御利口連あらば一挺の短銃を懷ろにして帰京する

決心に御座候天道自ら悠々一死狂名を博するも亦一興に御座候(狩野亨吉宛 明二八・五・十)

かなり激烈な物言い、で、「御利口連」への腹立ちは「一死狂名を博する」ことさえ辞さないふうである。「御利口連」の「裏面」にこだわっているわけであつて、「竹で割つた様な気性」(七)の坊っちゃんの原型をすで見出すことができる。

つまり、「馬鹿」であることへの執着は、明治二十八年の松山行きの際にも見出されるし、十一年後の明治三十九年「坊っちゃん」執筆前後にも顕著である。また、執筆三年前の「愚かければ独りすゞしくおはします」(明三六)の句を加えてもいいだろう。この句については次のような評がある。

句に言う「愚」は、世間通俗に言うそれではなく、以前に「木瓜咲くや漱石拙を守るべく」(明三十)と詠んだ「拙」に通う語である。あるいは、学生時代の詩に言う「狂愚亦嘉誉を買ふに懶し」(『木屑録』明治二二)という意識の連続する生きざまがここに流れている。(小室善弘『漱石俳句評釈』

明治書院 一九八三・二)

ゆえに、「馬鹿」という言葉には、「頑だ漱石」と『木屑録』に署名した青年期以来の漱石の生き続ける姿勢がうかがえる。それは、「拙」や「狂」という言葉と通底しているだろう。「増給がいやだの辞表をだしたいのつて、ありやどうしても神経に異状があるに相違ない」(十一)という野だの坊っちゃん評は、「馬鹿」が実は破壊力を秘めた「剣呑なる」(『人生』明二九)「狂気」と隣り合わせであることを暗示しているだろう。

東京帝国大学教授会に抵抗する明治三十九年の漱石は、十一年

前の松山行きを痛切に思い出しながら、二十世紀の「御利口連」に対決しようとしたのである。その意味では、確かに「坊っちゃん」の世界に対してほとんど地続きのように思われる」（竹盛 天雄 前出）。

では、作品世界のなかで「御利口連」とは誰かといえ、教育があり、利口で複雑で「表と裏とは違つた男」（八）である教頭の赤シャツと校長の狸と画学の教師野だいこんなどの赤シャツ党と「陰でこせ／＼生意気な悪いたづら」をする、赤シャツ予備軍の中学生ということになる。

ゆえに、「坊っちゃん」という小説は、関係の枠組みをきつちりと組み立てた勸善懲惡小説といえる。善と悪というさわやかな二分法ゆえに『坊っちゃん』は魅力的なのではないだろうか。

では、悪の特徴とは何なのだろうか。それは、赤シャツの特徴である裏表があるということである。と同時に、学校というものが本来的に裏表を持っているし、その中に生きている教師集団や生徒集団もまた、それにあわせるべく裏表を持っている。その学校のもつ不透明感を赤シャツは、「学校と云ふものは中々情実のあるもので、さう書生流に淡泊には行かないですからね」（五）と言つのである。

では、「学校と云ふもの」はどのように表現され、暴かれようとしているのだろうか。それは、「裏表のある奴」の「裏表のある言葉」による「裏表のある事件」が、起こる場として描かれて行くことにある。

二

では、まず「裏表のある奴」からみていきたい。「教育が生きてフロックコートを着ればおれになるんだと云はぬばかりの」（七）校長・狸は、教育という大義をふりかざして「表の言葉」を吐き続ける。その「教育の生霊」（六）狸を操る赤シャツこそ、「不浄の地」（十一）を「不浄の地」たらしめている張本人なのだ。「不浄の地」とは、「裏表のある奴」しか生きられない場―学校という場なのである。

こんな土地に一年も居ると、潔白なおれも、この真似をしなければならなく、なるかも知れない。向ううまく言ひ抜けられる様な手段で、おれの顔を汚すのを扱つて置く、^{「ちよぼい」}樽蒲一はない。（中略）どうしても早く東京へ帰つて清と一所になるに限る。こんな田舎に居るのは墮落しに来て居る様なものだ。新聞配達をしたつて、こゝ迄墮落するよりはましだ。

（十）

坊っちゃんにとって、清との世界がユートピアであるとしたら、赤シャツが磁場をつくる世界は反ユートピアである「不浄の地」なのだ。その磁場とは何かといえ、学校であり教育であり健康であり作為であり論理である。先ばしつていえば、教育がなく、風邪を引きやすく健康ではなく、自然な存在で非論理的な清と赤シャツとは、対概念の形象化といえる。対概念を二項対立に組み替えてみると、教育と無教育・健康（衛生）と病氣・論理と非論理・欲望と無欲ということになる。

清は、「教育のない婆さん」（一）であるが、赤シャツは「四国

辺にある」という僻地にある中学校の唯一の学士で、「是は文学士ださうだ。文学士と云へば大学の卒業生だからえらい人なんだらう。」(二)と紹介されている。

それは、あたかも漱石の松山中学校での位置に似ているだろう。明治二十八年、校長が六十円で漱石が八十円という破格の月給と、「横地(教頭)と漱石だけが宿泊(宿直)免除」という待遇の特異性がよく示している。漱石自身、大正三年の「私の個人主義」において、「当時其中学(伊予の松山にある中学校)に文学士と云つたら私一人なのですから、もし『坊っちゃん』の中の人物を一々实在のものと認めるならば、赤シャツは即ちかういふ私の事にならなければならぬ」と述べている。この文学士の価値がいかにありがたかったかが、よく分かる文章がある。

坪内氏が相当に尊敬せられていたのは文学士であつたからで、紅葉や露伴は如何に人氣があつても矢張り芸人以上の待遇は得られなかつたのである。(内田魯庵「二十五年間の文学の社会的地位の進歩」『太陽』明四五・六・十三)

「文学士」赤シャツが、「文学書を読むとか、又は新体詩や俳句を作るとか、何でも高尚な精神的娛樂を求めなくつてはいけない・・・」(六)と、坊っちゃんの「蕎麦と団子」という「物質的の快樂」のかわりに勧める趣味は、漱石が熱中したものだ。特に、松山中学校と第五高等学校時代において、俳句への熱中は周知の通りで、生涯の作句数の約七割が、松山・熊本時代のものである(小室善弘・前出)。

赤シャツが親しむ「帝国文学とか云ふ真赤な雑誌」(五)も漱石との縁は深い。清の対極にある教育のある奴の典型として描か

れる赤シャツに、漱石の影は十分さしている。というより、いくら坊っちゃん的に行動したとしても、現実には漱石は赤シャツの位相にいるほかない。その確認とそれからの離脱のための『坊っちゃん』であつたと言えよう。

漱石は、松山中学校に赴任して次のような書簡と句稿を送っている。

結婚、放蕩、読書三の者其一を扒むにあらざれば大抵の人は田舎に辛抱は出来ぬ事と存候(子規宛 明二八・五・二六)
月給は十五日位にてなくなり申候 近頃女房が貰ひ度相成候故田舎ものを一匹生摘る積りに御座候(斎藤阿具宛 明二八・七・二五)

放蕩病に臥して見舞を呉れといふ一句

酒に女御意に召さずば花に月(正岡子規へ送りたる句稿 その五 明二八)

赤シャツは、マドンナと結婚しようとし、小鈴相手に放蕩し、帝国文学を読む。いわば、漱石が考えた「田舎に辛抱」するための三つの条件をすべて実行しようとしている「裏表のある」文学士なのだ。

もともと、この中学校の底流に動いている陰險な策謀は、赤シャツのマドンナ獲得の欲望にある。障壁となる山風の排除にこずつて、坊っちゃんまでも巻き添えにしてしまったというのが真相に近いだろう。有光隆司がいうように「坊っちゃんはこの事態を必ずしも理解していない、つまりこれは古賀と山風にとっての悲劇であつた」(『坊っちゃん』の構造―悲劇の方法について『国語と国文学』一九八二・八)。

しかし、(六)の職員会議の席上、「蕎麦と団子」という食欲の「物質的の快楽」のかわりに、読書とか「新体詩や俳句」を勧めて長たらしい説教をする赤シャツに、「マドンナに逢ふのも精神的娛樂ですか」と聞く坊っちゃんは、「理解していない」ゆえに問題の所在を、的確に指摘できたのである。坊っちゃんは山嵐にさらにいいつのる。

あの野郎の考ちや芸者買は精神的娛樂で、天麩羅や、団子は物質的娛樂なんだらう。精神的娛樂なら、もつと大べらにやるがい。何だあの様は。馴染の芸者が這入つてくると、入れ代りに席をはづして、逃げるなんて(中略)全く御殿女中の生れ変りか何かだぜ。ことによると、彼奴のおやぢは湯島のかげまかも知れない。(十)(、は本文のママ)

「元は旗本」で「清和源氏で、多田の満仲の後裔」(四)という武家的な坊っちゃんにとって、赤シャツがいかに異質であるかを強調するために動員されたイメージが、「御殿女中の生れ変り」か「おやぢは湯島のかげま」なのだ。権謀術数に長けた「御殿女中の生れ変り」あるいは、「湯島天神前の茶屋に侍る男娼」の息子ということになる。それは、暗に権力と性をたどっている。それも、ひねくれた権力と陰湿な性だ。「裏表のある奴」の持つ権力と性という欲望がうすまぐ場が「不浄の地」の「不浄」たるところなのだ。欲望が裏表を生むことになる。

三

次に、「裏表のある奴」の操る「裏表のある言葉」について考えていきたい。

さて、裏表のない山嵐や坊っちゃんが性的なものを剝奪されているとしたら、「裏表のある」赤シャツは、性的なものを顕在化させる。一連の事件の底部に暗流するものは、赤シャツの性愛なのだ。ゆえに、山嵐と坊っちゃんは、それを暴露するべく赤シャツが「芸者と会見する」(十)という「角屋」の前の「枳屋」という宿屋に籠もることになる。

赤シャツの性愛は分裂している。その対象は芸者とマドンナである。芸者は「小鈴」といい、うらなりの送別会に入ってきた芸者のなかで「一番若くて一番綺麗な奴」で、「お、しんど」とか「知りまへん」とか「おきなはれや」「およしなさいよ」とかの関西弁をしゃべっている。「明治の文学で、「坊っちゃん」ほど方言の効果に意識的だった小説も珍しく、江戸のべらんめえと松山のなもし言葉の対照もあざやか」という指摘があるが、それに芸者の関西弁を加えてもいいだろう。

マドンナは、芸者の使う関西弁ではなく、伊豫弁、あるいは共通語を使うのだらうが、その言葉は出て来ない。うらなりから赤シャツになびきそうな節操のない女として登場してくる。送別会の席上、山嵐は「かの不貞無節なる御転婆」(九)と言い、また坊っちゃんは、「余つ程気の知れないおきやんだ」(七)と言う。

その意味では、マドンナも赤シャツ同様清の対極にある「裏表のある奴」ということになる。聖母マドンナというあだ名とは、逆の実態をしていることは、下宿の御婆さんと坊っちゃんとの会話から推察される。婆さんが、坊っちゃんの待ち焦がれている手紙の書き手の清を、奥さんと勘違いしての会話だが、マドンナのアンチマドンナ性は如何なく表現されている。清とマドンナを截然

と対置せしめるものは、その言葉が「慥か」か「不慥か」である。一言でいえば信頼するに足るか、信頼するに足らない「裏表のある言葉」を操る「裏表のある奴」かということになる。西洋から輸入されたばかりの理想の女性を意味するマドンナが、歌舞伎の「新版越白波」（しんぱんこしのしらなみ）の女賊「鬼神の御松」や「善悪両面児手拍」（ぜんあくりょうめんこのてがしわ）の「姫妃の御百」という毒婦と並べて語られ、「渾名の付いてる女にや昔から碌なもの居ませんからね」（七）と侮蔑される。結論として婆さんは、マドンナの「裏表のある言葉」を想定して以下のように言う。

「二 反古賀さんへ嫁に行くて、承知をしときながら、今更学士さんが御出だけれ、其方に替へよて、それぢや今日様へ済むまいがなもし、あなた」（七）

最終的な去就の判断基準として「今日様」（二）その日その日を守る神様。お天道様というのと同じ」という素朴な信仰をもちだし、人としての倫理を説く。

このような「裏表のある奴」であるマドンナに追い打ちをかけるのが、やっと着いた清の手紙にある次のような文面（七）である。

今時の御嬢さんの様に読み書きが達者でないものだから、こんなまづい字でも、かくのに余っ程骨が折れる。甥に代筆を頼まうと思つたが、折角あげるのに自分でかゝなくつちや、坊っちゃんに済まないと思つて、わざ／＼下たがきを一返して、それから清書をした。清書をするには二日で済んだが、下た書きをするには四日かゝつた。

という冒頭は、坊っちゃんに出す手紙に悪戦苦闘している清がよく分かる。ひたすら誠実で言葉通り坊っちゃん思いは疑うべくもない、裏表のない清と対照的に、うらなりから赤シャツに乗り換えようとしているマドンナは、「御転婆」で「おきやん」で「読み書きが達者」な教育のある「今時の御嬢さん」である。さらに言えば、赤シャツそのものが女性的なのである。「妙に女のような優しい声を出す人」（二）で、「どこ迄女らしいんだか奥行きがわからない」（六）のだから。赤シャツについて、坊っちゃんは以下のように言う。

尤も驚ろいたのは此暑いのにフランネルの襯衣を着て居る。

いくら薄い地には相違なくとも暑いには極つて。文学士丈に御苦労千万な服装をしたもんだ。しかも夫が赤シャツだから人を馬鹿にしてゐる。あとから聞いたら此男は年が年中赤シャツを着るんださうだ。妙な病気があつたものだ。当人の説明では赤は身体に薬になるから、衛生の爲めにわざ／＼（詭）らへるんださうだが、入らざる心配だ。（二）

赤シャツの赤シャツたる所以は、女性的であることと文明の病とも言うべき健康イデオロギーの信奉者ということにある。「健康を病からまもるといふ『衛生』の思想」に犯されているのだ。暑いのに赤いフランネルのシャツを着ている赤シャツは、身体を自然のままに受け取らないで、健康を過度に「心配」する「妙な病氣」にかかっているといえる。それに反して清は病氣をそのまま引き受ける自然な存在だ。そのことをよく表わすために清には、坊っちゃんが「四国辺にある中学校」への赴任が決まって、立つ三日前から病氣というコードが織り込まれ始める。

愈約束が極まつて、もう立つと云ふ三日前に清を尋ねたら、北向の三疊に風邪を引いて寝て居た。(一)

病気のコードを少しずつすりこまれていく清は、結局は死に至るのだ。赤シャツが病気になる前から、赤シャツを着て病気に備える当時の「衛生」の思想につかっているとしたら、清はその病氣を受け入れ、死んでしまう。

赤シャツやマドンナが「裏表のある言葉」を操る「裏表のある奴」として、そういう清の対極にあるとしたら、もう一つの対極は坊っちゃんの子の中学生である。彼らが「裏表のある事件」をひきおこすのである。

四

明治二十八年、子規は松山に帰る漱石に以下のような漢詩を送っている。

夏目漱石の伊豫に之くを送る

去れ三千里、

君を送れば暮寒生ず。

空中に大岳を懸け、

海末に長瀾起こる。

僻地交遊少く、

狡児教化難し。後略

(吉川幸次郎『漱石詩注』岩波新書)

子規がここで使っている「狡児」という言葉は、注目に値する。当時の文学において子供及び少年は、「狡児」ではなく純粹無垢な存在というイメージができたつたのではないだろうか。この「狡児」というイメージを使うために、漱石は勸善懲惡という

小説方法をとったとも考えられる。

着任早々の坊っちゃんをつぎつぎに襲う一連の事件―天麴羅事件、団子事件、バツタ事件、咄囃事件―は「狡児」の「狡児」らしさを遺憾なく發揮するものである。

では、天麴羅事件からみていこう。

一時間あるくと見物する町もない様な狭い都に住んで、外に何にも芸がないから天麴羅事件を日露戦争の様に触れちらかすんだらう。憐れな奴等だ。小供の時から、こんなに教育されるから、いやにひねつこびた、植木鉢の楓見た様な小人が出来るんだ。無邪気なら一所に笑つてもいい、が、こりやなんだ。小供の癖に乙に毒氣を持つてる。(三)

ここには、田舎という閉塞性が、「狡児」をより「狡児」たらしむという視点があるが、バツタ事件や咄囃事件(四)ではそのような猶予はなくなってくる。

おれなんぞは、いくら、いたづらをしたつて潔白なものだ。

嘘を吐いて罰を逃げる位なら、始めからいたづらなんかやるもんか。いたづらと罰はつきもんだ。罰があるからいたづらも心持ちよく出来る。いたづら丈で罰は御免蒙るなんて下

劣な根性がどこの国に流行^{はば}ると思つてるんだ。金は借りるが、返す事は御免だと云ふ連中はみんな、こんな奴等が卒業してやる仕事に相違ない。全体中学校へ何しに這入つてるんだ。

学校へ這入つて、嘘を吐いて、故魔化して、陰でこせ／＼生意気な悪いたづらをして、さうして大きな面で卒業すれば教育を受けたもんだと癪違^はをして居やがる。話せない雑兵だ。

(四)

ここで、『坊っちゃん』冒頭の単純明快ないたずらが生きてくることになる。坊っちゃんのいたずらと対置する時、「狡児」たる中学生のいたずらの質の複雑さとたちの悪さが浮き上がる。ということとは、暴れん坊・坊っちゃんというキャラクターは、「狡児」たる中学生の登場のために用意されていたとさえ考えてもいいだろう。いたずらはするけれど、潔く罰を受ける坊っちゃん、あくまで白を切ろうとする中学生との違いもよく分かる。咄嗟事件の際には、廊下に張り込んだ坊っちゃんが中学生の裏表を突き詰めたと思ったにもかかわらず、彼らはそれさえも認めようとはしない。

おれが宿直部屋へ連れて来た奴を詰問し始めると、豚は、^{〔おたふ〕}打つても擲いても豚だから、只知らんがなで、どこ迄も通す了見と見えて、決して白状しない。(四)

ついに、坊っちゃんは中学生を「豚」とさえ言い始める。そのような生徒観について、川嶋至は以下のように言っている。気になるのは、坊っちゃんが徹底して生徒を愛していないことである。しかも、特定の生徒を愛さないのではない。生徒全体に親しまないだけでなく、むしろ憎悪さえしているようなのだ。(『学校小説としての『坊っちゃん』前出)

「豚」とすら嘲罵される中学生の坊っちゃんに対する「裏表のある事件」の延長として、師範学校と中学校の乱闘事件を位置づけるなら、この作品には二つの力学が働いていることになる。一つの中心には文学士赤シャツがおり、学校という場の裏でマドンナ獲得工作がひそかに進行している。もう一つの中心には赤シャツ予備軍の「狡児」たる中学生がいて、学校をより強く意識させ

る表の場で乱闘事件が起こる。その結果、山嵐と坊っちゃんは、狸と赤シャツの行使する権力によって辞職に追い込まれる。もっとも、坊っちゃんの場合は、自分からということになるのだが。山嵐と坊っちゃんを追放して「赤シャツ党」の天下となった「不浄の地」は「不浄の地」として無傷のまま残される。「何ひとつ向こうの構造には触れられない」ことが、読後のはかなさを醸成するのだ。

おわりに

『坊っちゃん』発表後、漱石は次のような手紙を書いている。

拙文御推賞にあづかり感謝の至に不堪候山嵐の如きは中学のみならず高等学校にも大学にも居らぬ事と存候然しノダの如きは累々然としてコロがり居候。小生も中学にて此類型を二三目撃致候。サスが高等学校には是程劇しき奴は無之(尤も同類は沢山有之)候。要するに高等学校は校長杯に無暗にとり入る必要な故と存候。山嵐や坊っちゃんの如きものが居らぬのは、人間として存在せざるにあらず、居れば免職になるから居らぬ訳に候。貴意如何。

僕は教育者として適任と見做さる、狸や赤シャツよりも不適任なる山嵐や坊っちゃんを愛し候(大谷繞石宛 明三九・四・四)

この作品執筆一カ月前に英語学入試委員辞退という漱石の行った行動は、この書簡で言うところの「山嵐や坊っちゃん」的行動といえるかもしれない。彼らは学校という場を去るほかはない。坊っちゃんが「街鉄の技手」になったように、明治四十年三月、

漱石は、当時世間から特別の尊敬を受けていた大学の先生というポストを捨てて、今とは違ってぐんと社会的地位の低かった「新聞屋」になる。

以後、新聞小説家として、漱石は坊っちゃんが疎外されていた恋愛という関係の真っ只中に切り込んでいくこととなる。『吾輩は猫である』では苦沙弥サロンという場を描き、『坊っちゃん』では学校という場を描いた漱石は、場から関係のなかに降りていったことになる。それは裏表ではかたづけかない、ぬかるみのどこまでも続くわけのわからない世界であつたといえよう。

注

- (1) 小森陽一「裏表のある言葉―『坊っちゃん』における〈語り〉の構造―」(『日本文学』一九八三・三―四)
- (2) 平岡敏夫「『坊っちゃん』の世界」(塙新書 一九九二・二)や佐藤泰正「夏目漱石論」(筑摩書房 一九八六・一一)など。
- (3) 川嶋至「学校小説としての『坊っちゃん』」(講座夏目漱石 第二巻)有斐閣 一九八一・八)所収。
- (4) 小谷野敦「夏目漱石を江戸から読む―新しい女と古い男」(中公新書 一九九五・三)
- (5) 菅虎雄の喧嘩の相手は菊地謙二郎で慶應三年一月、「茨城県水戸の生れ」の会津っぱ。予備門及び帝大で一緒にあつた正岡子規の『筆まかせ』の友人評によれば「敵友」。明治二十七年、山口高等学校教授兼舎監となり、翌年には漱石を招聘しようとしたが、漱石はそれを断り「松山に赴くために準備支度金として五十円の借金を申し込む」(増補改訂 漱石研究年表)。菊地は明治三十四年に東亜同文書院監督兼教頭、その後清国師範学校日本総教習兼両江学務

所参議となり、明治三十九年辞任し帰郷。(『教育人物事典』 ぎょうせい 一九八四)

- (6) 相原和邦「『坊っちゃん』論」(『日本文学』一九七三・二)には、「にじみ出す寂寥感」とある。

- (7) 「『坊っちゃん』について」(『坊っちゃん』解説 新潮文庫 一九八八)

- (8) 平岡敏夫「松山中学時代」(『国文学』学燈社 一九八九・四) (一)は筆者注。

- (9) 内田道雄注「夏目漱石集Ⅱ」(『日本近代文学大系 二五』(角川書店 一九六九)

- (10) 三好行雄「『坊っちゃん』」(『鑑賞日本現代文学 五 夏目漱石』角川書店 一九八四)

- (11) (12) (9)と同じ。

- (13) 小田亮「性」(三省堂 一九九六)

- (14) 柄谷行人「小森陽一との対談 夏目漱石の戦争」(『海燕』一九九三・三)

- (15) 「小生は今度大学も高等学校もやめに致して新聞屋に相成候」(狩野亨吉宛 明四十・三・二二)による。

引用は、『漱石全集 第二巻』岩波書店 一九九四)による。ルビは適宜省略。

(にしむらよしこ)神戸市立摩耶兵庫高等学校)